

平成20年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859）

子年にちなむ青梅市内の甲子講・大黒天(七福神)・子の権現社

今年は、十干十二支の組み合わせでできる六十干支でいうと、戊子（つちのえね）の年です。そこで、子（ね）にちなんだ開運招福につながるものを御紹介します。

○甲子講（きのえねこう）

甲子は、十干十二支の第1番目どうしの組み合わせで、陰陽道では、祭りを行なうのに最も吉日であるとされます。甲子は、年単位では六十年に一度めぐってきますが、長過ぎます。そこで、60日に1度めぐってくる甲子の日に行なわれるようになったのが、甲子講です。1年に6度の甲子の日の夜に、人々が集って子（ね）の刻まで起きて大黒天を祀り、諸願成就や福德円満などを願います。甲子待（きのえねまち）ともいわれる甲子講、あるいは甲子社について、青梅市内では、以下の史料にみることができます。

江戸時代後期の旧上長淵村について、文化4年(1807)以降に書かれた『法鏡』と天保3年(1832)に書かれた『村鏡』に、「甲子・・・祭り」とあります。江戸時代後期の安政6年(1859)から明治30年(1897)年まで旧小曾木村・小布市について書かれた『市川家日記』に、「甲子にて・・・大黒待」と記されています。また、昭和16年発行の『青梅郷土誌』に「住吉神社の石段右側に、八坂神社と甲子大黒天の合社がある・・・」、昭和19年発行の『三田村史』に「澤井上分中風呂に甲子社がある。」とあります。さらに、昭和47年発行、石川 博司著『ともしび』（第20号）に、今井にある正福寺の昭和40年の甲子講の様子と、下成木上分の鎮守社の甲子講が記述され、上成木下分の二本竹にある山神社境内の甲子様も、紹介されています。

以上の史料中、今井にある正福寺の甲子堂と、下成木上分の鎮守社では、現在も甲子講が行なわれています。さらに、史料には無い「野上の大国講」が、甲子講と推察されます。

① 正福寺の甲子講

今井二丁目1045番地にある正福寺では、年間に6回ある甲子の日に、大黒天が安置された大黒堂(薬師堂)が、午前8時過ぎから午後4時頃まで開かれています。参拝者には甲子講の講員により、御札が配られます。前述の『ともしび』に、「御札の版本に文化7年(1810)の銘があった。」とあるので、その頃には甲子講が行なわれていたことが分かります。最近の甲子講については、文化財保護指導員連絡協議会活動報告書第21号に詳述されています。

今年の甲子に当たる日は、1月30日・3月31日・5月30日・7月29日・9月27日・11月26日です。どうぞ参拝にお出かけください。

② 成木二丁目の甲子祭

下成木上分の鎮守社は、現在、成木二丁目にある八雲神社です。「きのえねさま」と称されている大黒天は、八雲神社の御神体の傍らに祀られています。現在、甲子祭は4月第1日曜日に、自

治会総会の後で行なわれます。総会と甲子祭は、回覧板で案内されています。

当日は、大黒天を神社から成木二丁目公会堂の床の間に移し、お賽銭箱を設けお供物をあげてお祭りした後、直会（なおらい）が行なわれます。昭和7年生まれの男性によると、10数年前までの甲子祭では、氏子が100円～200円程度を借りて翌年に倍返しをしていたといひます。

甲子祭の始まりについては不明ですが、前述の『ともしび』に、「甲子様は明治時代の作製」とあります。

③ 野上の大国講

2月第2日曜日に、野上一丁目・二丁目の講員により大国講が行なわれています。野上一丁目にある春日神社境内に、平成6年に建てられた野上大国（おおくに）神社で、祭典が催されます。社殿には、大国主命（おおくにぬしのみこと）の掛け軸と大黒天像が祀られています。その後、野上第一自治会館で直会が行なわれます。大国講では、講元から福德資金として1000円を借り、翌年1500円を返済しています。大国講については、明治初年からの記録があり、かつては自治会の総会を兼ねて行われていました。詳細は、文化財ニュース第221号と、文化財保護指導員連絡協議会活動報告書第23号をご覧ください。

上記、「野上の大国講」を甲子講としたのは、民間信仰として、大国主命（おおくにぬしのみこと）と大黒天が混同されてきた経緯があるからです。

大黒天は、古代インドのマハー・カーラという戦闘と財福の神で、マハーは大、カーラは黒を意味します。中国に伝来後、仏教に伴って日本にもたらされました。大黒天は、元は、戦闘神として忿怒（ふんぬ）の形相で恐ろしい姿の像でしたが、多くの僧が来ても食事に困らないようにと僧院の厨房に祀られようになり、袋を持つ姿になりました。袋をかついだ姿が共通することと、大国主命（おおくにぬしのみこと）と大黒天の「大国」「大黒」の音韻が似ているため、日本在来の神である大国主命（おおくにぬしのみこと）と混同され、福相で俵を踏まえ小槌を持つ姿になりました。さらに、大国主命を火難より救ったという『古事記』の説話に登場する鼠が、子（ね）の方角すなわち北方の守護神である子（ね）の神の化身とされたところから、子（ね）と鼠が大黒天に結びつきます。中世以来、大黒天は福の神として民間に広まり、農村では農耕の神ともされ、農作を祈る日待（ひまち）と習合して、甲子講や甲子待の主導として祀られるようになりました。

○ 大黒天

福神信仰は、江戸時代には「七福神」へ発展します。「青梅七福神」のうち、大黒天は住江町にある延命寺です。延命寺には、福相の大黒天像の他に、忿怒相をし、象の皮をかぶる姿の大黒天が描かれた掛け軸があります。1月1日から1月15日まで、拝観できます。

○ 子（ね）の権現社

和田町二丁目にあります。吉野街道の「和田町自治会館前」バス停近くで、信号機がある交差点の北方50mほどの所です。飯能市にある「子の権現」を、個人が勧請したといひます。現在、近くの方が自主的に管理してくださっています。足腰達者の祈願に、地元や近隣からも参拝者があります。

（文責 三好 ゆき江）